

平成最後の恋愛も見当たらず盆地霧濃き朝を発ちたり
大口玲子

枕詞のように「平成最後の……」をつけるマスコミの風潮を皮肉った上句。「……大恋愛も見当たらず」と受けて見せた風刺が効いている。そんな枕詞は陳腐だよ、空騒ぎはやめときなさい、という声が読者にも聞き分けられる。結句の「発ちたり」はこの一首だけでは分らないが、一連を読めば、大分へ出かけたことが分かる。路線図の枝の拡がりこの春も北の小枝が一本枯れた

青山 仁

時刻表の本あるいはネットの路線図などにある日本全国の鉄道路線図をイメージすればいいだろう。たくさんこの路線が枝分かれしつつ日本全国へのびている。「枝」という比喩的確。「この春も」の「も」が、日本各地で廢線が相次いでいる現状を示しているようだ。

母に似た手は分厚くて不細工でじゃんけんぼんの強い我なり
小林まや

絵で言えば自画像のような一首だが、明るくてユーモラスで、その上、母への愛が読めて、なかなかの一首。下句「じゃんけんぼんの強い我なり」が、なんとも可笑しい。ユーモラスである

「スイミー」の音読をきく遠い海の魚の群れに紛れるように
今井洋子

「スイミー」はオランダ出身のアメリカの絵本作家レオ・レオ二作の絵本。小さなこい魚の話である。海で暮らす小さな黒い魚スイミー。絵本を見るのではな

短歌の現在

No.458 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

く、話を耳で聞くことによって、今までとはちがった味わいを感じた、そんな意味だろう。谷川俊太郎の日本語訳が出ている。

仲の良き親子ごつこの幕下りてひとり舞台上に取り残さるる
永田千奈

母上が他界されたことに取材した作だが、いわゆる挽歌とはちがう一連である。具体的な事情をまったく知らないわれわれ読者は、一首に表現された部分からだけ、物語を読み取らなければならない。「仲の良き親子ごつこ」をどう理解するか。一首には場面がないので、理解をふかめてゆく手がかりがないのが残念だが、何らかの物語の存在を感じ取ることはできる。

三月は別れの季節六歳の牝馬も高校三年生も

大月 閑

高校三年生と六歳の競走馬を同列・同格にあつかっている点が可笑しい。東京歌会に参加している作者なので、多少作者について知っている。女子高校の教員でなおかつ熱烈な競馬ファンらしい。そんな情報を考え合わせて、一首を読むと、いっそう面白さの厚みが増す。

「疲れた」がいっぱいつままっているのだろう
むこ
うから来る教師のわたし
大澤澄代

へとへとに疲れきってしまった日の自画像と読む。上句の独特な言いまわしが新鮮である。このままで充分理解できるが、鏡とかショーウインドウとかに写っている自分を見た場面と理解すればいっそう分かりやすい。「疲れた」がいっぱいつままっている自画像ってどんな